

第一室 第一詩 耳を澄まして

私は音を超えた音に耳を澄ます

それは私の夢の夜の国に忍び寄り

化石の光の部屋へと入ってくる

その音は、そのあまりの古さ故、真理によって群れ集まる。

私は私たちを超える音に耳を澄ます

それは脊椎せきついの見えない梯子はしごを駆け昇り

オルフェウスの図書館へと辿りつく。

そこは、絶え間ない光の中で、反逆の書物たちが遊ぶ場所。

灰色で刷られ、流砂の深みを持つ小さな言葉たちは

丹念に想いが縫いこまれているため

スピリットを幽霊にも神にもする

望遠鏡が独りでに、こちら向きに回転し

夢みる私たちを目覚めさせる。

かつて花開くことがなかった想いが、私を取り巻いた

誰も乗っていないレガッタ船のように。

私は豹のように聴き、

隔離された身体からだを切り離す

くすんだハートという季節風モンスーンによって病んだ身体からだを。

私が探し求める音が寄り集まる心臓の鼓動には

或る種の魔法が存在している

しかし、私が行きたいのは、その鼓動のさらに下なのだ。

星々の囁きささやに向かつて、その耳を傾けながら

集音鏡パラボラフレンテナの周りに群れ集まる

すべてのものの音の下に私は行きたい。

私は解ほどかれた音に耳を澄ます

その音は、あまりも虚ろに、純真な瞳でじっと覗き込む

時間の黒い狂気の中を

私たちの子宮の中で、震えるヴィジョンの種をまきながら

その音は私たちの形の本質としての光り輝く形を身にまとう。

私がコンパスの針に目をやると

謙虚な刃が見える

それは、荒れ狂う雨が下水管へと流れこまざるを得ないような

待ち受けていた抗あらがうことができないフォースだ。

震えるコンクリートの水路の中で

地下を走り抜けながら、

身を浮かべることができない水路がない空の世界で  
私たちが迷っているのだと、空を見上げて嘲笑っている。

私は音に耳を澄ます

あなたの声の中の音に。

あなたの扉の低木地帯を通り抜け

私は耳を、あちら側にじっと傾けている

あなたのハートの下で、言葉は行き場を失い

もつれ合った生命の繊細な構造体を

光が消滅させる。

私にできるのは、そこにあると知っている音に耳を澄ますことだけだ

どこに属するか分からない、無国籍の、発音できない煌めき

切り出された手足たちが、あまりにも無垢であるがため

その音は、心臓の肉を癒すのだ。